

セネガルの民主主義、人権およびカースト

ペンダ・ムボウ

要約

カースト制度に関する包括的な研究は、どの程度まで深くセネガル社会が変容してきたかを理解する一助となりうるであろうか。この変化を妨げる要因は、社会の歴史のなかで一つの主要な現象といえる階級制度を再生産するメカニズムの領域で特定されることは間違いないであろう。的確な事例から、我々は信念へのカースト制度の影響力、その制度の基礎にあるイデオロギイ的ディスコースの強さを明らかにしようと試みる。それから、多くの異なる著作や研究から、カースト制度の概念を明らかにしようと試みる。しかし、まずは、この問題に直面しているセネガル社会がどのような対応をしているかについて概観する。

カースト制度に直面するセネガル市民社会

セネガルにおける市民社会の出現は、民主主義制度の強化、完全な複数政党制そして構造調整政策の勝利につながる。しかし、この事象の主な重要性は、市民としてみなされたいというセネガル人の強い意志にある。セネガルの市民社会の特徴は、そのダイナミズムと多様性に

ある。したがって、このカーストの考察は、市民社会とその社会の一集団を形成する知識人との関係を考察する出発点になる。この関係の複雑さは、私たちの関心領域をはるかに超えている。それでも、セネガルでこの問題を議論する困難さは、マドレーヌ・ムカマバノ Madeline Mukamabano (訳註ールワンダの著名な女性ラジオ・ジャーナリスト)の次の言葉から測ることができる。「この番組を作ろうとした時、一部の人々からこう言わ

れた、『的はずれだ。それは本当の問題ではない。心理的な問題であり、解決できる。皆の生活に何も影響は及ぼしていない』と。だから、今、私がこの問題を取りあげたことが正しかったかどうかさえ分らない」。このような反応は、私たちの国の市民社会の性質と、セネガルの知識人たちの社会を直視する勇気のなさを表している。

事実、セネガルの人権団体は、階級やカーストの階層が個人の生活や個人と社会との関係、結婚生活、さらには個人の自己実現に及ぼす影響を分析する調査をしたことはない。身分上の階層制度とはいかなるものか。たいして国内の人権団体の関心事は、アフリカ社会の現実を必ずしも把握しているとはいえない西欧のNGOの関心に沿っているため、この重要な問題に関する限り、彼らにやる気は見られない。モーリタニアの奴隷問題がようやく国際的に議論されたのは、悲劇的な事件が連続した一九八九年のセネガル・モーリタニア危機（訳註―セネガルとモーリタニアの農夫たちの土地争いから両国の領有権問題に発展。それぞれ相手国の在留者を送還しあい、外交関係断絶に。そのなかでモーリタニアの奴隷たちをセネガルに送り返すという名目で多数の黒人モーリタニア人が不当に逮捕され、殺されたりした）の後だ。もちろん、それとカ

ースト問題を同レベルで語ることはできないが、個人の出現を促すためにも、重要な教育活動に着手すべきだ。

だが、市民社会のかなりの部分は、慎重にも、階級やカーストの階層の消滅に関して曖昧な態度をとりつづけている。それは、誰かが考えるように、社会の全領域をあらゆる決定の外に締め出しておく排除の論理なのか。その制度はタブーを集団の無意識のなかに非常に強固に植えつけたため、掟を破ることが引き起こしうる不幸を潜在的に恐れ、多くの人々はそうしたがらないのか。

カーストの問題は、まだ表面的にすぎないセネガルの民主主義の脆弱さを表している。長い間言われてきたことだが、常に個人の社会的出身が権力との距離を決定するため、カーストの人々が政党を結成したり指導しようとしたことはほとんどなかった。カースト出身の活動家が多くいることで知られているマルクス主義フェミニストの諸政党においても、たとえその人たちが優秀であっても、幹部になることはほぼ皆無であった。それは、元国家教育大臣のI・D・Tが、鍛冶屋の子孫が率いる政党を初めて結成した一九九二年まで続いた。今日では、多数のカーストの人々が政党の幹部であったり、次期幹部を目指している。O・Nは人民解放党 *Parti pour la Liberation du Peuple* (PLS) の代表であり、I・Sは

セネガル民主党 Parti Démocratique Sénégalais (PDS) のワッド氏(現大統領)の後継者と目されている。また、いわゆる左翼政党に属する最も重要な活動家のなかに、P・GやM・Tそして民主主義同盟 Ligue Démocratique のギセ Guisseがいる。

一九九〇年代、独立後四〇年にして普通選挙権が確立したため、ごく少数ながら議員に立候補しようとしたカーストの人々がいた。首相をはじめ、これまでカーストの人々が重要なポストに就くことはしばしばあった。しかしそれらは任命職であり、選挙で選ばれて議員になることはめつたになかった。そのため、議会では、カーストの議員はたいいてい全国区から選出された人たちであり、県の候補者(地方区)として選出されることはほとんどない。県レベルでは、候補者個人の資質や政治的才能、あるいは社会的出身が決定的な要素となる。常に社会的出身がその他の要素より優先するため、そこには明らかに逆説が生じる。左翼政党のアフリカ民主主義・社会主義党 And-Jéf PADS 書記長のランディング・サヴァネ Landing Savane によれば、彼の党はカーストの人々に関する問題に直面した。フータ Fouta 地域から立候補を志望した熱心な党員の一人は、グリオ Griot (訳註―カーストの一つで、詩人、音楽家、魔術師など)で

あるため、党内を含めて有権者から立候補すべきではないと猛烈な反対にあった。『新しい地平線 *Le Nouvel Horizon*』の調査によれば、カーストの人々が当選しない確率は、フータ Fouta やウォロフ Wolof ではいまだ高く、党の一部活動家たちが会議で発言することさえ許されないこともある。昔はカーストの人々が集会で発言する権利を与えられていなかったからだ。

独立以来、政権を保持している社会党 (PS) は、伝統的に有力な一族に頼ることで、そのような政治的追放を存続させてきた。今、「再建」の掛け声のもと、彼らはこの状況改善に努めており、カースト出身と言われている O・T・D が改革のリーダーになるまでに至った。しかし、世間ではこの人のことがいろいろ取り沙汰されている。その風当たりの強さは、彼がカースト出身であることに関係があるのか、あるいはもっと客観的な要因、例えば政治的経験が浅いとか、ディウフ大統領から政治だけでなく行政分野においても特権を移譲された特別な立場(当然、嫉妬を招く)のためなのかは分らない。

事実はどうであれ、カースト問題は決して過小評価できない。これは、一九八一年に元大統領のサンゴールの後任が M・N ではなくアブドゥ・ディウフ Abdou Diouf に決まった時に M・N が認識したことであった。彼は否

定するが、多くの人々はカースト出身であるということ
が彼を不利な立場に置いたと考えた。それ以来、彼は、
マラブー marabou (イスラム導師) の一族一つひとつと
関係をつくり、フータのタル Tall家 (Toorobe) にぐっ
と接近した。しかし、以前から人々は、彼の父は、ニア
センネ Niassenes (カオラク Kaolack の有力なマラブー)
の鍛冶屋の出身だと考えている。彼はこの話をさらりと
かわし、妻はブレース・ディアニユ Blaise Diagne ー第
一次大戦中 (一九一四―一九一八) フランス国民議会の
初代セネガル人代議士ーの「子孫」だとうれしそうに語
る。

したがって彼は、出身という点において、二〇〇〇年
二月の大統領選挙でディウフと十分対決できると感じて
いる。しかし、多くのセネガル人が重視する系図の問題
は、しばしば操作される。長い間、M・Nは新しい系図
をつくりたがっているという噂が流れていた。フランス
の雑誌『もうひとつのアフリカ L'Autre Afrique』はこの
問題をとりあげ、次のように肯定した。「M・Nは、故
郷カオラックのある年老いた女性が彼の系図について書
いた手紙を政界に回している。この手紙が信じるに値す
るならば、M・Nはどうやら信望の厚い一族の出のよう
だ」。書かれている内容は別にして、この問題にまつわ

る議論が起きたことは、個人の社会的出身がかなり重視
されていることを証明している。事実、M・Nの生まれ
故郷、クール・マディアベル Keur Matibabel の村はカー
ストの人々が建て、住みつき、墓地もあるということをし
知らない人はない。M・Nが彼の出身に関する話題に区
切りをつける必要を感じているなら、それは単に、セネ
ガルの市民社会もいわゆるカーストの知識人も、啓発や
教育をしてこなかったからだ。

私たちが知る限り、カースト問題に関する重要な公開
討論は、一九九二年四月、イツサ・サム Issa Samo (ジ
ヨール・ウアカム Joe Ouakam (訳註―セネガルの著名なア
ーチスト) が主宰し、知識人や芸術家が集まる
ACTANCE というグループが開催したのが初めてだ。
ダカールの知識人、芸術家、外交官 (西欧諸国) がこの
討論会に参加した。討論のテーマに真正面から挑んだカ
ースト出身の知識人は、数学教授のサキル・ティアム
Sakhir Thiam と議論の口火を切った私たちだけであっ
た。その他多数のカースト出身と思しき知識人たちは、
一言でも発言するのを避け、自分たちが同意できない意
見が出て反論さえしなかった。極めてあからさまな事
実だが、発言をするときは、どの参加者もすべて自己紹
介から始めた。すなわち、皆自分について曖昧さを残し

たくなかったのだ。これまでの人生のなかで初めて、私たちは窮地に陥った。「私たちにこの討論を開く権利はあったのか？」と。我々が力をもつことを世間が恐れているときに、我々のことを公衆の面前で語ったことは約束違反だとして、一部のカーストの人々は私たちを激しく叱責した。

このような場合、エリート全般の態度をどのように理解すればよいのか。ランディング・サヴァネの次の言葉が最もうまくそれを説明している。「実は我々はこの事象を完全に無視するという原則から出発した。決してそれに触れることはなかった。しかし現実には、私たちのなかの何人かはそれを全面的に支持してきた」(L'Autre Afrique)。ランディング・サヴァネは革命的で寛大な思想で知られている六八年五月革命の世代に属するが、彼らの先輩と同じく、あくまでもこの論争をはっきりさせようとしている。このことは、セネガル弁護士会設立当初の弁護士の人オゴ・カーン・ディアロ氏 Ogo Kane Diallo の次の驚くべき反応を説明している (L'Autre Afrique)。「知識人は皆、サンゴールはフランスの言いなりだと忌み嫌い、加わろうとしなかった。そのため、彼は自分の周囲をカーストの人々で固めた」。この見方はセネガルでは決して珍しくはない。ある意味、サンゴ

ールとデイウフ大統領は、出世させてやることで恩義を売るために、自分の周囲をカーストの人々で固めた。では、能力、才能、緻密さ、誠実さが入る余地はあるのか。一九八〇年、文化省に近い若手顧問として、私たちはこの問題に関する意見を記録しなければならなかった(サンゴールが大統領を辞める少し前)。「カーストの人々は平均より賢いため、私は彼らを責任ある地位に任命する。事実、私は姪たちを教養のあるカーストの男性と結婚させた」。

最後に、社会階層に関して市民社会は理想主義的で寛大でありつづけている。二〇世紀の終わりに、この台頭しつつある市民社会の一つの象徴は、あとどれだけ私たちが進まなければならぬのかを示している。カースト出身であるということは、依然として排除し、侮辱を与え、傷つけてもよい理由となっている。カースト化されるとは何を意味するのか。

他の点に話を移す前に、政府内におけるカーストの地位について考察してこの章を終える。社会学者アブドゥライ・バラ・ディオプ Abdoulaye Bara Diop はこの事象が現代社会で役割を果たすとは考えていない。この意見の裏づけとして、彼は、セネガル政府のなかでは、鍛冶屋出身者がその他の人口分類と比例して多いという調査

結果を持ち出す。個人の社会的地位が採用や昇進に影響を及ぼさないことが事実であったとしても、同僚間の関係においてそれが存在することは否めない。独立時、カースト出身のドウドウ・ティアム Doudou Thiame が大臣を務めた外務省は「宝石店」と呼ばれ、汚名を着せられた。この他にも、政府内では、部下が「上司は宝石商、靴修繕屋、あるいは木工職人だから、命令するような立場にはない」との理由で、カースト出身の上司の命令に従わない話が多くある。D・Mはフルーヴ地区で、ある官庁の長を務めていたが、周囲の人々の侮蔑的な態度に耐えきれなくなり、配置転換を申し出たことを認めている。

市民社会が強化されつつあり、公共心がセネガル人に根づく必要があるため、興味深い現象が現れてきている。共和国大統領のグリオであり特別顧問として知られていたエル・ハジ・マンスール・ムバイエ El Hadi Mansour Mbaye は、次の発言で人々を驚かせた。「私は、他の社会主義者のように議員になって、セネガル発展に貢献したい。これを真剣に考えるときが来た」。当局は今、グリオの才能を動員し、グリオが正当とみなされるために体現するその価値を利用しているため、その呼び名は変わった。彼らはもはやグリオではなく、「伝統的伝達者」と呼ばれている。この言葉にほとんど含みはないし、相

手を喜ばせる。彼らの操り方を変えることで、当局は、彼らに必要不可欠な存在だと自覚させた。そのため、恐らくこのような突然の願望が出てきたのであろう。さらに、カーストと呼ばれる人々がもつ価値の一部は、近代世界にとつて貴重なことが証明された。実質的にグリオが支配しているコミュニケーションの世界は、そのよい例だ。彼らは報道、とりわけ電波による報道（もちろん新聞もそうだが）に秀でている。その代表格が、日刊の全国紙の元総支配人であったバラ・ディウフ Bara Diouf である。彼はグリオであることを誇りに感じていた。この新たに得た自覚、新しい事象に関して、木工細工職人連合（ラオベラondsは木や木材に関する仕事に従事）がセネガル全土の森林再生を自分たちの目標に設定したことに留意したい。このような前向きな意思があるのに、なぜカーストが執拗に存続し、事象が固定化されるのであろう。

カースト制度に関するいくつかの考察

西アフリカのカーストの地理

西アフリカ（サハラ砂漠と緑地帯アフリカの境界に位置

するサヘロ・スーダン地帯)における職人や音楽家の内婚集団、つまりカーストと呼ばれる集団全体に関する論文で、タル・タマリ Tal Tamari はカーストの空間的境界に触れている。鉄、木材、皮、さらには音楽に関する職業に従事していることでよく知られるこれら集団は、マンディング Mandingues、ソニンケ Soninkes、ウオロフ Wolofs、プール Peuls、トゥクルール Toucouleurs、ソングイ Songhay、セヌーフォ Senoufos、ドゴン Dogons、トウアレグ Touaregs、モール Moors という約一〇のエスニック集団に分かれる。国境で再分割されたカースト集団は、現在では、マリ、モーリタニア、セネガル、ガンビア、ギニア、ギニア・ビサウ、コートジボワール北部、ブルキナファソ、ニジェール、ガーナ東部、アルジェリアのサハラ砂漠地帯の一部、そして北カメルーン、リベリアおよびシエラレオネの数カ所に分散する(タル・タマリ、一九八八・一九九七)。カースト集団におけるこの階層は何につながるのか。

カーストの起源に関する仮説

ジョルジュ・デュメジル Georges Dumézil のインド・ヨーロッパ語族社会に関する著書(一九五六・一九五八)は、カースト制度の状況にスポットを当てている。それ

によれば、異文化の衝撃がその決定的な要素の一つのようだ。インドの例を見れば、インドは階級社会からカースト社会に変容を遂げたことが分かる。事実、ヴェーダ時代の後期に、階級社会は三種類の「色」(ヴァルナ)に分割された。すなわち、ブラーミン・詩人・僧侶、クシャトリア・戦士・王族、ヴァイシャ・商人である。戦いに敗れた黒い肌の人々(ダーサ、シュードラ)からなる下位の四番目の色は、その頃インドに上陸して状況をさらに複雑にしたアーリア人に仕える人々であった。この時期から、ブラーミン階級がカーストのすべての特徴——ヒエラルキーのなかのある特定の地位を占める職能集団、世襲制、内婚制、厳格な禁制などを規定した。

インド以前では、同じ過程がエジプトの「カースト化」に見られる。デュメジルによれば(一九五八、一七頁)、「五世紀、ギリシャ人は、最古のアテネ式職能別階級制度の起源、原型をそこ(エジプト)に発見した。実際、この構造は、今から二つ前の千年期の中頃に小アジアやシリアに突然現われたインド・ヨーロッパ語族がエジプト人と接触した後、ナイル流域だけに形成された。インド・ヨーロッパ語族はまた、エジプトに馬をもたらし、人々にその使い方を教えた。ファラオ王の古代帝国が存続のために、新しい機構、すなわち常備軍と軍人階級を

つくったのはその後のことであった」。

『植民地以前の黒いアフリカ *L'Afrique noire précoloniale*』で、著者シェイク・アンタ・ディオプ Cheikh Anta Diop は、デュメジルのインドにおけるカースト起源に関する仮説に疑問を投げかけている。ストラボン（彼自身は古代ギリシャの歴史家メガステネスの説をもとにしている）の文章をもとに、シェイク・アンタ・ディオプは、インドのカースト制度はいかなる種族的差異も排除した職業の分業に適合すると考えた。事実、ドラヴィダ人がブラーミンであったと考えるもよい。これとあれば違うと言える基準は精神的あるいは物質的なもので、種族的ではなかった。ブラック・アフリカにおいて、とりわけスーダン西部では非常に古い事象だが、カーストのエジプト起源説を証明できる。カースト制度のなかで、家族あるいは個人の単位による職業の世襲がもたらした職業分化は、族（門）組織で始まった、というシェイク・アンタ・ディオプの説に同意できる。帝国時代、とりわけ、少なくとも紀元前二世紀に遡る古代ガーナ帝国時代、部族の文化や忠誠を捨てさせる行為は帝国の全領域に効果を及ぼしていた。

スーダン西部におけるカーストの起源は、エジプトからジャー・オゴ Jaa-Ogo が移住した時に生まれたと思

える。道化師のニョール Niole カーストについて、ヨロ・ディアオ Yoro Diao が展開する仮説から把握できる。研究者たちは揃って、ジャー・オゴが鉄冶金を習得したことを認めている（ボクゥーム Bocoum、一九九〇）。ステッフ Steff 船長は『フータ・トロの歴史 *Histoire du Fouta Toro*』のなかで、大変興味深い考えを展開している。「ジャー・オゴは非常に貧しく、家畜をほとんど持たず、自給する分しか耕さなかった。族長クンバ・ワリ Cumba Waly の一族は鉄を溶かし売る特権を持っていた。彼らは遠方の山まで出かけ、鉱石を採ってきては炉の中で溶かした」。

シェイク・ムサ・カマラ Cheikh Moussa Camara によれば、「ジャー・オゴは鉄を売っていただけでなく、フータも統治していた」。そこで、鍛冶屋の社会的地位の基盤となっているのがどこから来たのか疑問がわく。なぜ鍛冶屋はヒエラルキーの頂点から下位のカーストに転落したのか。なぜそのような衰退が？ この権力の喪失はどうして起きたのか。

これについては軍事的敗北がもつともらしい説明と見える。「ソッソ Sosso の最後の鍛冶屋王スマングル・カンテ Sumanguru Kante が有名なキリナ Kirina の戦い（一二二〇～一二三五）でスンジャタ・ケイタ Soundjata

Koukaに負けたため、ジャー・オゴはガーナのソニンケに負けた」。アブドゥライ・バティリ Abdoulaye Bathily (政治家) の仮説は、セネガル北部の鍛冶屋の社会的地位の没落を原因としていて大変刺激的だ(一九八九、二二二頁)。「スマングル政体の崩壊は恐らく全土に鍛冶屋が生まれたことによるだろう。地域貿易の拡大により、また誰でも簡単に冶金術が習得できるようになったことにより、スーダン西部で鉄が大量に出回り、その結果、マイノリティが伝統的に握ってきた産業の独占権は徐々に崩れていった」。

だが、「冶金の職業が社会に広がったことが、鍛冶屋の社会的影響の衰退に寄与した」としても、問題は何も解決していない。経済的資源を手に入れたにもかかわらず、なぜ根本的な変化に至るようなカーストの意識高揚はなかったのか。最近まで、アフリカ社会は物質的豊かさや重きを置かず、武器の管理を権力へのアクセスから切り離していた。

ガーナで生まれた中央集権の君主制は、下位カーストの政治的支配をさらに進めた。アブドゥライ・バラ・デイオブによれば(一九八二)、それは分業に基づく社会・経済的相互依存という意味ではなく、下位カーストの上位カーストへの依存という意味で、カースト間の関係を

発達させた。たとえそれが、アブドゥライ・バラ・デイオブの唱えるカースト形成の人種的理論(文化を生物学によって説明しようとする試み)に対立するとしても、次の基本的な考え方に戻る。カーストのヒエラルキーはその構成員の富に基づくものではないし、生産様式における役割に基づくものでもない。彼らの浄・不浄の度合いに基づくのだ。

この考察の輪郭のなかで、私たちの社会におけるカーストの進化に関する問題全体を検証するのは不可能である(歴史家がこれまで充分それをしてきた)。ただここで、カーストの構造は植民地化が浸透した一九世紀にすでに形を整えていたこと、そして、二つの重要な要素が社会を分断していたことを思い出そう。その要素の一つは自由であり、もう一つは世襲的職業分化(カースト)である。自由は、自由人すなわちゲールバール(単数形でgar)と奴隷すなわちジャーム(Jambo)を対向させる。カーストは、工芸、音楽、歌、神の賛美を行うニエーニョ(neño)と、この種の限定に縛られることのない人々であるゲールを対向させる。これらが社会を深く引き裂いている。研究者がカースト制度を分析するとき、たいいていニエーニョにグリオを含める。グリオは観念的職務を果たすとともに、歌や賛美の役割も果たした(言葉で生活する人々

という意味のサブ・レク(sab-lerk)。この分類は混乱を招く。ニエーニヨという言葉は非常に限定的な意味を含んでいて、政治的権力からしばしば排除される工芸人のカーストに主として用いられる。一方、グリオは中央集権の君主制にとって不可欠な要素である。今でも、総じて、カースト内の人々は内婚と不浄で、特徴づけられる。

ここで再び、タル・タマリが出したカーストの人々と奴隷の関係、およびカーストの再生産(生殖)に関する重要な結論をみてみよう。ある地域では、カースト内の人々は、本来カーストではなかった人々と交わることで人口を増やしてきた。最も一般的な方法、カーストの地位にある男と奴隷の出自をもつ第一夫人以外の妻の間に来た子どもたちが最も頻繁に認める方法は、子どもたちが父の地位を引き継ぐことだ。貴族の家族とその奴隷の間で広く行われたモデルに従うように、カーストの一家に捕まった捕虜の子孫がやがて主人の家族に統合される場合もある。これは鍛冶屋によく起きた。それ以外の情況として、貴族が奴隷になるのを逃れるためにカーストになりすました例が挙げられる。カーストの人々は決して奴隷にならなかつたことはよく知られている(タマリ、一九九七)。また、セネガルでは、カーストの出自を隠すよりも、奴隷の出自を隠すほうが容易である。

不浄の概念に関して、少なくともそれは理論上の事象であるとも主張できる。つまり時代を遡ってみれば、ゲールは生まれつき優れていて、ウォロフ Wolof やハルプルール halpular を出自とする純血な人々であり、ニエーニヨは生物学的に劣り、異国の出身者であるとされている。ヨロ・ディアオ(「覚書」)によれば、「鍛冶屋の汗が不吉であるといわれるのは、彼が鉄と火の二つの物の間にいるからだ。一つは硬く、もう一つは熱い。その仕事は労多く、汗に触れた人は苦痛と不幸を与えられる」。現実には、カースト制度のなかで思想は基本的な位置を占めている。なぜならば、そのような制度は単にメカニズムだけではなく、ある集団が他の集団から受ける態度・振舞いをすでに想定しているという精神的表現でもあるからだ。だが一つ疑問が残る。すなわち、どのような過程で、カースト自身による価値の内面化と形成が起きたのか。この問題は、カーストの結婚における経験を分析することで再度とりあげる。その前に、シエイク・アンタ・ディオプとアブドゥライ・バラ・ディオプの説明を見てみよう。

シエイク・アンタ・ディオプ(一九八七、一一頁)は、どのカーストにも「不自由な点と有利な点、譲渡と補償があり、均衡を保っている」と評価し、「カースト制度

の安定は、社会的役割の世襲的引継ぎにより保証されている。それは、競争を廃止するために宗教的禁制に名を借りた独占に等しい」と付け加える。シェイク・アント・ディオプが述べていることは資本主義以前の社会にほぼ当てはまることであり、意思決定から外された事実は、容易に埋め合わせができないことを理解する必要がある。アブドゥライ・バラ・ディオプは、農業経済の支配で状況を説明している(一九八一、七三〇頁)。それは、農民が支配する商業システムのなかで職人が農民に依存するという結果をもたらす。これについて、いくつかの点で異論があるだろう。昔から、農民が商業を支配したことはない。サハラ砂漠を横断した通商は、ムスリム学者と親しい商人階級を生み出したが、農民は後の一八世紀あるいは一九世紀にイスラム化された。

さらに、ニエーニヨが農業に従事することは禁止されなかった。彼らは自給経済においてゲール・バドロ padolo (農民) と同じ役割を果たしただけでなく、生産道具の管理を支配した。では、なぜニエーニヨは、中世末期、実質的に同じ状況にあったヨーロッパの有産階級(ブルジョアジー)と同じ進化を遂げなかったのか。恐らくそれは、ヨーロッパ有産階級が都市で起こしたコミュニケーション運動が、一六世紀から一八世紀にかけヨーロッパの

社会・経済の転換の先鋒になったからだろう。当初、コミュニティ運動の唯一の目標は、有産階級が僧、戦士、農耕従事者からなる三頭社会に認められるようになることだった。ニエーニヨは、部族固有の文化を捨てさせる過程のなかで生まれたため、この種の認知を必要としなかった。認知はしばしば解放運動の目的となった。

最後になるが、カーストの人々とゲールによって維持された恩顧主義的關係において、贈与の作用を過大評価してはならない。真に経済的に依存したのはグリオだけで、職人に依存するのと同じ程度グル^⑧に依存していた。よく言われることだが、侮辱は交換の貨幣化によって強化されたとも推測できる。

日常の生活、結婚事情とカースト

現在のアフリカ社会のように、危機にある社会は、逆説的な状況を生きている。貨幣が唯一の現実的価値になったが、危機回避の必要性は個人と集団にアイデンティティの反射能力を発達させた。私たちの伝統と文化的価値の賞揚は、しばしば人と人の関係を決定づける。したがって、カースト事象の現実には、主として低い社会階級における日々の現実を反映した例を通して把握できる。

日常生活とカースト

娘がゲールの男から侮辱を受けたダカール出身の年老いた宝石商は、娘が生んだ孫を男の一族にするより自分の一族として認知することを選んだ。一方、ある人は、自分の娘にグリオの男性と結婚するのをあきらめ、独身主義を通すよう迫った。このような出来事は結婚話に限られたものではない。なかには、いわゆるカーストの人と何らかの接触をもったから、自分に不運がまわってきたと言う人もいる。ある女性は、「鍛冶屋出身の髪結いに結ってもらったら髪の毛が抜けるから、今まで一度もそのような人に髪を結ってもらったことはない」「鍛冶屋出身者の手に触れたら、たちまちコブができる」と言う。運転手のS・Lは、鍛冶屋のベッドに座るだけで同じ効果が現れると言う。

こうした話は枚挙に暇がない。当然、それらは証明などできないし、人々の空想と想像の世界から生じたものだ。したがって、たとえカーストの人々に対する日常の態度に進歩があつたとしても、カーストの人々の現実にもっと注意を向けて然るべきだ。困難に出会つたら、人は隣人や友人など他者のせいにしがちである。そして、観念的に正当化された理由が集団の記憶に深く刻み込ま

れているため、カーストの人々はたいてい、簡単に標的にされる。カーストの人はいつも、他人の運を変える能力を持つている、悪運をもたらすと非難される。カーストの人々は成功に手が届きそうになれば、常に、出自を忘れるなど釘を刺される。サルトルが『ユダヤ人問題についての考察 *Réflexions sur la question juive*』（一九五四、一〇八頁、一一三頁）で書いていることは、我々の社会のカーストの人々にあてはまる。「彼ら（ユダヤ人）は法的保護、富、名誉を築いても、さらに攻撃を受けやすくなるだけで、彼らはそれを自覚している：だが、彼らが正当な社会の頂上に登りつめようとした瞬間、もう一つの無定形で散漫であらゆるところに存在する社会が突然目の前に現れ、彼らを拒絶する。たとえ最大の成功を収めても、我こそ正統だと主張するこの社会への参入は決して手にできないため、独特の方法で、彼らは名誉と富のむなしさを感じる。聖職者、彼らはいつでもユダヤ教聖職者になれる、優秀と無比の両方を備えた聖職者に。彼らは特段の抵抗にあうことはない。しかしある種の逃避、理解しがたい空虚が周囲を空洞にし、彼らが触れるものすべてを無価値にする不思議な作用が生じる」。程度の差こそあれ、カーストの人々も同じ現実を経験する。どのような成功を収めるにしろ、彼らはカースト出身で

あることを思い起こさせられる。この出自は彼らのつまずきの原因であり、彼らは失敗を許されない。カーストの人々には魔力があると非難する下層階級の近辺では、カーストの人々のティア *tiya* (悪を呼び寄せるまじない) に用心しなければならぬと信じられている。鍛冶屋が持つ神秘的な力は口汚い歪んだ言葉で一般化して信じられてきた。火の支配は神秘的な能力を必要とする。鍛冶屋は割札を執り行った。彼らは癒しの能力を有して、まじない (*magi*) を使って鉄を加工した。カーストの人々が発する言葉に対するこの恐怖は、信頼のない友人関係をつくる。不信の理由は個人の無意識のなかに潜み、文化と教育の影響力は遍在する。

婚姻関係とカースト

カースト制度は婚姻関係において特に厳格に表れる。ドレフュス事件でブルーストが述べたように、「ユダヤ人の問題になれば、運転手も貴族と同じような態度をとる」(サルトル、一九五四、三六頁)。知識人、国家機構のなかで重要な地位につく男も女も、その大多数が結婚については家庭の主婦とほぼ同じ考え方をもつ。つまり、カーストの垣根を越えるのは非常に困難である。求婚者はすべて結婚調査(身元調査)を事前に行わなければなら

ない。何よりも、血の混じり合いを避けなければならない。この状況がもたらす結末は数限りなくあるが、最もよく見られるのは早期離婚と家族との断絶だ。私たちの社会では、夫婦という概念は一般的ではない。結婚は基本的に家同士の問題であり、個人の問題ではない。その他の結末に中絶―カースト問題が常に原因になるわけではないが、その素地になる―があるし、自殺、自殺未遂、幼児殺し、一生のトラウマなども、たいてい不幸な恋愛と関係していた。さて、結婚問題は個人の問題なのか。ほとんどの場合ノーだ。

確かに個人の内なる革命はないが、多くの個人の意識の積み重ねが精神構造に革命をもたらす基盤になる。カーストの人々だけに内婚が厳格に課せられているため、彼らの間で、複婚や家同士で決める親族間の結婚(時には子どもの健康に有害な結果をもたらす)の比率が最も高い。だが、カーストの人々はこれら特徴をマラブールと共有していることも確かである。イスラム教、学校、都市化は転換の要因になるのか。

西アフリカにおいてイスラム教は深く根を下ろしている、その起源は少なくとも八世紀に遡る。しかしイスラムが下位の階級にまで浸透したのは、奴隷貿易時代や植民地侵略の時代になってからだ。だがその存在がカースト

ト制度を根本から変えることはなかった。逆に、イスラム教は、貴族的な官職者をすべて宗教的な官職者に置き換え、完璧にこの制度に適応した。多くの点において、マラブーの家は宮廷を思い起こさせる。もちろん、バンベイ Bambey、メケ Mekhé、そしてかつてのティヴァワ―ネ Tivaouane などの小さな町にイマーム（イスラム導師）のカーストはいたが、ダカールのような大都市では例外である。アヴドゥライ・バラ・ディオプの調査結果は、今日でもあてはまる（一九八一、九四―九五頁）。「宗教界では、彼ら（サブ・レク、グリオ）は『言葉の人々』という世襲的に引き継いできた職を使って、副次的な職務を果たしている。モスクのムアッジン（礼拝を呼びかけるアザーンを唱える人）は信者が主催する夜会で宗教歌を専ら歌う」。

イスラム教のカースト制度への適応は、イスラムの平等の原則に反する。イスラム史上初の革命―アッバース王朝の革命（七五〇）―は、まさにアラブ人と非アラブ人の従属的關係を終わらせるためであった。イスラム教は、いかに重要であれ、イデオロギーの力だけでカースト制度を抜本的に変えたり終わらせることはできなかつた、とするアヴドゥライ・バラ・ディオプの考えは正しかった。また、大多数が高位カーストであるマラブーは、

平等原則に基づいた行動を起こさなかつた。

それ以上に、高位とされるマラブーの出自はまだ明らかにされていない。これに関して、一八世紀から一九世紀にかけて革命を導いたマラブーの非常に控えめな出自が判明したとしても、イスラムが貴族的抑圧の唯一の代替である限り、伝統は完全に矛盾している。なかでも、問題は文化にある。概して、アフリカ文化はもつたいていぶっている。それは外部の貢献を把握し、適応させる能力だけはもっている。アフリカ文化は他の文明と接することではほとんど変わらない。これには客観的な理由がある。たとえば、学校がもたらした変化は重要ではない。西欧の学校への通学は、心性を大きく乱さない。同じ現象は専門職の訓練に至るまでずっと見られる。九人が大学教育を受けたカーストの大家族を見てみよう。彼らの専攻は次の通りだ。三人が化学物理、二人が自然科学、一人が経済学、一人が薬学、一人が総合機械学、そして一人が文学。これは単なる偶然なのか。いかなる場合も、カーストの人々は科学の分野、とくに実験科学の分野において群を抜いている。この現象はカーストの職業に科学志向の要素があるからではなからうか。また、若年失業は技能カースト出身の人々にはあまり影響を及ぼしていない。通常、これら若者は、授業のある時は学校に行き、

ない時は父や叔父の仕事を手伝う。別の例として、経済的利益集団をつくったカースト出身の職工見習いの若者がモダンな宝石店を開業した。さらには、法律(国際関係)で博士号を取得した人がその資格に適した仕事を見つかることができず、宝石商として生計を立てている。独立後、技能カーストの技能を保護育成していれば、内発的成長という点からアフリカに技術基盤を提供したのではないだろうか。

カーストの人々の態度と展望

カーストの人々の態度は人を惑わす。まず、カーストの人々は体面を気にする。それは、過度に見栄を張る、贈物を受け取る(人間の尊厳の概念とは反する)などの行為を通して示される。しかし、カーストの社会環境の共有と、時として非常に保守的な価値(家族意識、名誉など)への賞賛もある。マックス・ウェーバーのプロテスタント主義と資本主義の関係の分析は、等しくカーストの人々にも当てはまる。力があらゆる方向へ解放たれないよう(制限要素としての劣等感)、この制度はカーストの人々が仕事に精を出すよう仕向けた。また、第二次世界大戦の後、かなりの数のカーストの人々がアフリカの主要な首都へと移住していった(モリスMorice、一九八

二)。彼らは宝石細工、つづれ織、靴製造などの技術を持ち込んだが、商業にも進出している。外国製品の国内市場進出による手工業の衰退は、カーストの人々の移住の要因と言えるのか。この説は実際、経験則にすぎない。しかしもつと綿密な調査をすれば、とりわけ国際社会全体におけるカーストの人数と移住労働者の比率を検討すれば、決定的な結果を得られると考える。カーストの人々の経済的成功は近代セネガル社会の一つの重要な特徴である。当然、カーストの人々は常に生産部門に存在してきた。多くは、独立時、それまでの工場を木材、宝石加工、靴製造、衣料製造などの家族経営の会社に変えた。その他、バオルロウのように商業に参入して成功したカーストの人々もいる(L'Autre Afrique)。

カーストの人々の二つ目の反応は、「現状」を受け入れ、自らをあるがままに宣言することを拒否しないタイプである。この姿勢は、特に民主主義の構築のプロセスにおいて、批判されるかもしれない。ある人をカーストとして意識的に捉えることは、真の民主主義達成の必須条件であるカースト制度廃止に向けた一つのステップとなるべきだ。だが、グリオをはじめ、一部のカーストの人々は社会的立場を誤用している。劣っていると見られていることを口実に、彼らは社会的関係を歪め、多くの陰謀

に荷担し、現在広がりつつある物乞いに就く。この状況は、とりわけ、物乞いの社会的定着を促し、腐敗が成り立つ絶好の環境をつくる。物乞いを拒絶しない社会では、怠惰が一般的となり、寄生がよしとされる。セネガルでは、多くの人々が国と市民によって暮らしを立てているため、生産活動に就く人の数が減少する一方、その人たちの努力が無効にされている。それは単にカーストの人々の存在だけが問題ではない。この状況を支えるカースト制度がつくった社会関係のタイプの問題である。

極端な態度は拒絶である。特徴のない名前に乗じて、カーストとしての自分たちの状況を引き受けることを拒否する人々がいる。その他、自分たちの集団以外と婚姻関係を結ぶことで、カーストからの脱出を望む人々もいる。このことは、カースト出身の知識人の間で、異集団との結婚件数が多いことで説明される。カースト外の結婚は常に悪いわけではないが、しばしば生まれた子どもたちが厄介な立場に置かれる。子どもたちは *geer ben tank* (足が一つだけ) と侮られる。結婚の砦は陥落の過程にあると評した哲学者スレイマン・バシル・デーニユ Souleymane Bachir Daigne の説に、ある種の樂觀を感じることができ。だが、「都市化によってカーストの人々が個性のない街に溶けこむことができた」とする彼の意

見は受け入れがたい。危機にある社会において経済的成功を収めることが追放の根拠をとり崩したとしても、一族の氏はカーストの人々の身分証明書に残る。

結びに、個人の解放は発展の必要条件であるため、カースト禁止のために闘うことは、人権の第一原則となる。ドグマ、偏見、狂信、専横、寄生…、端的に言えば、あまりに賢くなりすぎて自分たちの社会構造を見えなくさせている時代遅れの風習の信用を失墜させるような新しい考え方を支持しないで、いかに私たちの経済的後進性と闘えるというのか。この問いに答えることは、さまざまな時代遅れの風習のなかでも、まずカースト制度の根絶を提案することになる。職業に従事することが社会的地位の下落とまったく関係がないことにセネガル人が気づいたとき、社会は進歩の速度を早めるだろう。

参考文献

- BAHILY, Abdoulaye (1989), *Les portes de l'or : le royaume de Galam (Sénégal) de l'ère musulmane au temps des négriers (VII^e-XVIII^e siècles)*, Paris, L'Harmattan, 379p.
- BOCOUM, H. (1990), « Contribution à la connaissance des origines du Tekroum », *Annales de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines*, 20, p.159-178.

- Bois, Guy (1989), *La mutation de l'an mil*, Paris, Fayard, 288p.
- Boulégué, Jean (1987), *Le Grand Jolof (XIII^e-XVI^e)*, Blois/Paris, Façades/Karthala, 207p.
- BRAUDEL, Fernand (1969), «Histoire et Sciences sociales. La longue durée», in *Écrits sur l'Histoire*, Paris, p.41-83.
- DIOP, Abdoulaye Bara (1981), *La société wolof. Les systèmes d'inégalité, de changement et de domination*, Paris, Karthala, 358p.
- DIOP, Cheikh Anta (1987) [1960], *L'Afrique noire précoloniale, étude comparée des systèmes politiques et sociaux de l'Europe et de l'Afrique noire, de l'Antiquité à la formation des États modernes*, Paris, Présence Africaine, 278p.
- DUMÉZIL, Georges (1956), *Heur et malheur du guerrier : aspects mythiques de la fonction guerrière chez les Indo-Européens*, Paris, PUF, 149p.
- (1958), *L'idéologie tripartite des Indo-Européens*, Bruxelles, Latomus, Revue d'études latines, 123p.
- ETOUNGA-MANGUELLE, Daniel (1990), *L'Afrique a-t-elle besoin d'un ajustement culturel?*, Paris, Édisud, 1990, 140p.
- MORICE, Alain (1982), *Les forgerons de Kaolack : travail non salarié et déploiement d'une caste au Sénégal*, Paris, Université Paris-V, thèse pour le doctorat de 3^e cycle, 350p. multigr.
- SARRRE, Jean-Paul (1948), *Reflexions sur la question juive*, Paris, Gallimard.
- Tal, Tamari (1988), *Les castes au Soudan occidental : étude anthropologique et historique*, Nanterre, Université Paris-X, 1987, thèse de doctorat d'État, X-893p. multigr.
- (1997), *Les castes de l'Afrique occidentale. Artisans et musiciens endogames*, Nanterre, Société d'ethnologie, 464p.
- 付記 本翻訳の原文は、フランス語論文 Mbou, Penda (2000), «Democratie, droits humains et castes au Sénégal», *Journal des Africanistes*, 70(1-2), p.71-91, Paris ｻﾞ ｻﾞ の英訳は、International Dait Solidarity Network の H P H ｻﾞ ｻﾞ 公開された ｻﾞ ｻﾞ (http://www.idsn.org/Senegalcaste.htm) (2004年10月末現在)。なお、スペースの都合上、原文の序にあたる部分は、最後の段落を冒頭の「要約」として訳出した以外は省略したほか、本文中の膨大な註も全て割愛した。(編集部)
- (翻訳：小森恵／翻訳協力：友永雄吾・李嘉永)